「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～若者に萌（きざ）す・・・新たな意識と行動とは・・・①～

明日は１月１７日。平成７年（1995 年）に起きた阪神・淡路大震災から３０年です。

半世紀近く若者を相手とする仕事をされてきた中村学園大学客員教授の占部賢志さんが、「当世若者気質」というタイトルで、戦後の若者の生き方には**二度の転換期**があったとおっしゃっています。

また、メディアが作り出す虚像に惑わされず、若者に萌（きざ）す新たな意識と行動について述べられています。

最初の節目は昭和48年（1973 年）の第一次オイルショック（高度経済成長の終焉）の頃です。

それまでは、スポ根ものの漫画『巨人の星』が子どもの心をとらえ、一方、学生は反体制運動にのめり込んだ時代でした。

しかし、スポ根ものも学生運動もほどなく鎮静化。放送が始まった時代劇『木枯らし紋次郎』の決め台詞・・・

「あっしにはかかわりのないことでござんす。」は、到来した個人主義時代を象徴していました。

こうして、他からの干渉を嫌う若者が増え、「三無主義（無気力・無関心・無責任）」と揶揄されたのがポスト成長期。「しらけ世代」なんて言葉も流行りました。

ところが、**平成７年（1995 年）１月17日に起きた阪神・淡路大震災で一変します。**あの惨状を見た全国の若者は相次いで支援に動きます。これが２度目の節目です。ボランティアの数は学生を中心に延べ 138 万人。

この年が**「ボランティア元年」。**若者は公共への奉仕に目覚めました。被災地に縁もゆかりもないのに、苦境を見ておけず、手を差し伸べたのです、若い世代も**「惻隠の情」**を見せていきます。

当時私は高校教師で、地震発生から１ケ月半後の３月１日に卒業式。式後、一人の生徒が私にこう言ったのです。

「自分は予備校に行くことになりました。それまで１ヶ月近くあります。ぼくは明日から友だちと神戸に行って救助を手伝うことにしました。先生お世話になりました。」と・・・

その後、彼は３月末に第一志望の大学から補欠合格の吉報が入ります。そして、大学卒業後は、高校の歴史教師として教壇に立っています。

平成９年（1997年）には、ロシア船が日本海で座礁。ドラム缶9500本の重油が流出。秋田から島根までの沿岸が汚染されます。重油の回収は困難を極めました。海面を覆った油をひしゃくですくい取る手作業ですから5年はかかると予想されましたが、27万人のボランティアによって三か月で海をよみがえらせました。

この時、大阪でフリーター暮らしをしていた若い女性は、ニュースで知って地を訪れてみました。作業本部では大勢のボランティアを効率よく調整するだけでもてんやわんや。そこで、その役目を任されるのですが、見事にさばきました。回収作業も急ピッチで進みます。

彼女は今まで気づかなかった、人のために意欲的に尽くす自分を知りました。

その後、彼女は人生の目標を見つけ、看護師の道に踏み出すのです。

（毎日新聞　写真特集より）

「致知」７月号　風の便り　「当世若者気質」　中村学園大学客員教授　占部　賢志

どうでしたか？この通心（信）で「惻隠の情（心）」については紹介しましたよね。

次号では、占部さんがおっしゃる、**「メディアが作り出す虚像に惑わされず、若者に萌（きざ）す新たな意識と行動」**のまとめです。楽しみにしておいてくださいね。